

「承認レス」実現に向けた業務改革に積極果敢に挑戦 —“Remotaがはまる業務”の分析から利用拡大へ

キッセイ薬品工業株式会社

- 事業内容
- 医療用医薬品の研究、開発、製造、販売
 - 特別用途食品等の開発、販売

キッセイ薬品



左から村上真理子氏、徳永理人氏

1946年の設立以来、長野県松本市を拠点に医療用医薬品事業を手がけるキッセイ薬品。「研究開発なくして製薬企業にあらず」の信念のもと研究開発に力を注ぎ、オリジナリティの高い医薬品を国内外に提供するとともに、腎疾患患者向け食品の開発・販売など食の面からも人々の健康に貢献している。

今回、同社の経理機能を担う財務管理部において、請求書処理業務の省力化、効率化を実現するべく「Remota」を導入いただいた。導入の背景や定着に向けた取り組みと、導入による効果、そして今後の展望について、同社 財務管理部 主任の村上氏と同じく財務管理部の徳永氏に話を伺う。

背景・課題

手入力の手間の削減とヒューマンエラーのリスク低減に期待

—「Remota」を導入いただいた背景や、当初抱えていた課題について教えてください。

村上氏：改正電子帳簿保存法の施行を機に、法制度対応・ペーパーレス化・ガバナンス強化の3点を目的として「Concur Invoice」を導入することになり、その際に併せてご紹介いただいたのが「Remota」でした。これまでOCRを活用した経験はありませんでしたが、せっかく「Concur Invoice」を導入して請求書処理の自動化・効率化を進めるからには、証憑を読み取るところも省力化したいなど。インプットからアウトプットまで人の手をできるだけかけずに進めたい、という思いで導入を決めました。

徳永氏：それまでは送金先の銀行情報などもすべて手入力しなければならず、各拠点の経理担当者たちは月2,000枚の請求書を1枚あたり2~3分かけて処理していました。1日に処理する枚数は少なかったかもしれませんが、それでも毎日少しずつ進めなければならぬ、膨大な時間を費やす業務だったと言えます。

また当然そうした作業を続けていけば、入力する際のヒューマンエラーのリスクも大きくなります。財務管理部では各拠点で作成された請求書に対して、ペンを持って口座や名義を一つひとつ慎重にチェックしていく作業を、毎日長い時間をかけて行っていたのです。「Remota」導入によって、こうした状況を改善できればという期待がありましたね。

導入の過程

支払状況から「Remotaが“はまる”業務」を分析し、活用を後押し

—導入後の活用状況はいかがでしたか？

徳永氏：最終的な目標として「承認レス」を掲げて各ツール導入を進めましたが、「Remota」と同時に社内でも「Concur Invoice」が導入されて一気に社内インフラが変

わったため、今までになかった新しい機能としての「Remota」が霞んでしまって、1年半ほどはなかなか「Remota」を上手く活用・普及できていない状況でした。もちろん以前の紙ベースの業務と比べれば大幅に効率化できていますが、このままでは「承認レス」には到達できないのではないかとという危機感がありました。

村上氏：個人的には「Remota」を活用すれば月2,000枚の請求書を2人ほどで捌けるはずだと思いますし、そこで省力化が進めば、私たちは判断を伴うような“人でなければできない仕事”に時間をかけていけるはずです。そう考えると、せっかく導入した「Remota」を活用しない手はありませんから、なんとか状況を変えようとユーザー会に参加しました。



財務管理部
主任

村上 真理子

ユーザー会で他社のお話をお聞きして印象に残ったのは、各社がまず活用状況を分析して課題を洗い出し、その解決に向けた施策を実行に移し、上手くいかなければチューニングをされている、ということです。その必要性を事例紹介から肌で感じ取り、すぐに翌日から「Remota」を普及させて社内の請求書業務を変えるための取り組みを始めました。

—「Remota」活用の定着に向けて、具体的にどのような取り組みをされたのでしょうか。

村上氏：まずは全社の請求書をすべて洗い出して「どの部門からどちらの支払先への支払が多いか」と状況を分析し、「Remotaが“はまる”業務」を探しました。従来のように「こんなツールがあります」とツールを用意して利用してもらうのを待つのではなく、活用して

もらえそうな部門にこちらから「こういった使い方はどうですか？」と提案していくことにしたのです。

分析を進めてみると、プロジェクトメンバーたちがそれぞれ請求書を受け取り、それらを一人の方がまとめて起票している部門に「Remota」がマッチしそうだということが見えてきました。そこで、該当する部門で「Remota」に連携されたBoxの専用フォルダに各メンバーが受け取った請求書を格納してもらおう」という新たな運用を導入することに。格納された請求書を「Remota」が読み取り、起票者が確認する段階まで持ってきてくれるという点で、大勢が請求書を受け取り起票を一人が行うという業務の性質に「Remota」の機能が上手くはまったと感じています。

取り組みを進めるにあたって「こういった使い方にマッチする機能はありますか」とファーストアカウンティングさんにご相談し、「Box連携を活用いただけそうです」と教えていただいたことが助けになりました。ユーザーとの距離が近い会社だなと、魅力に感じます。

導入効果

便利さの実感から、日常的な活用が定着。申請者・承認者 双方の負担軽減が実現した

—「Remota」を導入いただいたことによる効果をお聞かせください。

徳永氏：以前は、会社で紙の書類を前にしなければ請求書処理を行えない状態でしたが、今ではどんな状況でもパソコンが1台あれば申請・承認作業ができるようになりました。入力する側はもちろん、承認する側の手間も相当削減できて業務が楽になり、今後につながる効率化ができた実感しています。

村上氏：入力作業の担い手が人から「Remota」に変わ



るものの請求書の動き自体は変わらないため、日常的に活用してもらえる状態にスムーズに至れたことが良かったと思っています。「一度使い始めたけれど、その後使うのをやめてしまった」という方がいないことは大きいですし、狙い通りですね。

徳永氏：そうですね。「Remota」が“ただ読み取るだけ”でなく、コンカー連携をはじめ一度使えば「便利だな」「楽になるな」と実感できるものであり、また学習によってどんどんパワーアップしているからこそ、継続して使ってもらえているのかなと感じます。

村上氏：またインボイス制度開始に伴って返還インボイスの発行が必要になりましたが、こうした今までにない新たな業務について「誰が・どのように行うか」を決める際に、「Remota」が部門間のコンフリクト解消にも役立っています。

特に返還インボイスは発行・支払にかけられる時間が非常に短いため、起票者にとって大きな負担になり得



財務管理部
徳永 理人



ますが、「Remota」を活用した運用を提案することで「それなら担当できる」とスムーズに受け入れてもらうことができました。制度開始以降、トラブルや不満もなく順調に運用を行っており、とても良かったと思っています。

今後の課題と展望

全社への普及を進め、「承認レス」の実現を目指す

——今後の展望と、その中で当社に期待されることがあればお聞かせください。

徳永氏：特定の部門での成功事例ができたので、今後は全社的な普及活動を進めていきます。学習によって

「Remota」の性能がどんどんパワーアップしていることを感じるため、その魅力を全社に広めていきたいところです。

また「Robota」など他のソリューションも活用できるところで上手く活用しながら、目標とする「承認レス」の実現に近づけていければと思います。

村上氏：この「承認レス」が実現できた暁には、機械がやってくれることは機械にお任せして。やはり私たちはルーチンワークに追われることなく人間が考えるべきことを考え、これからの会社のため、その価値を高めていくために時間を使っていかなければなりません。最近では特に企業内容の開示が強く求められるようになり、コーポレートガバナンスやサステナビリティなど考えなければいけないことも増えてきていますから。こういったことにエネルギーを注いで、もっともっと良い会社にしていきたいと思っています。

記事の内容は、2024年8月2日時点での情報です。

FAST ACCOUNTING

ファーストアカウンティング株式会社

独自の AI-OCR 技術で紙証憑をデジタル化することで、
経理の負担を軽減し、貴社の生産性向上を支援いたします。

<https://www.fastaccounting.jp/>

